

手をつなごう

平成18年11月27日

岡山県立東備養護学校

支援部だよりNO. 22

こんな子どもたちの存在はありませんか？

学級の中に特別な支援を必要とする子どもがいる場合、その子自身への指導も大切ですが、周りの子どもへの指導が大きな鍵になります。発達障害のある子どもの場合、刺激を受けやすく、周囲の些細なことにも敏感に反応して落ち着かなくなったり、気持ちのコントロールがうまくいかなかったりすることがあるからです。

そこで、今回は周りの状況にも目を向けてみようということで、

児童心理2006年10月号臨時増刊NO. 849

通常学級で求められる理解と支援

埼玉県所沢市教育委員会健やか輝き支援室支援委員 阿部利彦



よりご紹介します。

わざと刺激する児童・生徒

発達障害のある子が一番気にしているキーワード（サル・ブタ）や言葉（赤ちゃんみたい）を言ってわざと刺激しからかう子どもたち。いつもそばにすることが多いので、「仲が良い」と勘違いされやすく、「あの子たちは仲間ですから」などと教師が誤解することもある。

こんな子どもたちの存在はありませんか？

トラブルを期待する児童・生徒

自分たちは直接手を下さないけれど「今日もあいつが暴れてトラブルが起きないかなあ」などと楽しみにしているグループが存在していることがある。彼らは、教師が対応に追われて授業が中断している隙に勝手なことをして楽しんでいることもある。

行動を真似する児童・生徒

気がかりな子の中には、器質的な課題や学習の苦手意識から長い時間着席できない子がいる。その姿を見て、最初はちゃんと授業を受けていたはずの子どもたちが、「楽しそう」「面白そう」だと感じ、その真似をし始めることがある。

教師に発達的な視点が不足していると、彼らのようにわざと真似している子と器質的な課題のせいで取り組めない子に対して同じように強い指導を行う可能性が高い。

かげでコントロールする児童・生徒

たとえば、興奮しやすい子を狙って興奮させておいて、その子が興奮してパニックになるとスーッとその場から立ち去る。そうすると教師が来たとき、さもその子だけが一人で騒いでいるかのような状況がつくりだされる。

中学生くらいになると、教師の前ではパニックになっている生徒をなぐさめてみせたり、かばうような発言をしてみせたりする巧妙な生徒が多い。

子どもたちの気持ちを安定させ、学級全体を成長させることにより、自然に子どもたちが支えあい、学び合う雰囲気ができあがります。学級がまとまっていくのにそって、発達障害のある子どもたちも成長していくことが多いものです。子ども同士が高め合う力は、ときに大人の予想を超えるような、素晴らしい効果を生みます。

特別支援教育で重要なことは、すべての子どもにとって、安心して学べる居心地の良い環境、そしてそれぞれの子どもの「よさ」が十分発揮できる環境を通常学級の中につくり出すことなのです。